

同性愛者のカミングアウトにみる親子関係のダイナミクス：往復書簡を対象とした文書分析

島袋, 海理
名古屋大学大学院教育発達科学研究科：博士課程

田中, 裕史
名古屋大学大学院教育発達科学研究科：博士課程

<https://doi.org/10.15017/7178866>

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 27, pp.21-36, 2024-03-15. Seminar of Educational Sociology Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studies Kyushu University

バージョン：

権利関係：



同性愛者のカミングアウトにみる親子関係のダイナミクス

—往復書簡を対象とした文書分析—

The Dynamics of the Parent-Child Relationship in Lesbian/Gay Coming Out: Document Analysis of the Correspondence

島袋 海理・田中 裕史

1. 研究の目的

(1) 同性愛者とその家族をめぐる研究動向

本稿の目的は、同性愛者の子が親にカミングアウトした経緯と現在の心境を綴った往復書簡をフーコーの権力理論にもとづいて分析し、親子関係のダイナミクスを捉えることにある。具体的には、先行研究で検討されてこなかった、同性愛者による親へのカミングアウトが親子の相互作用を通じて受容される過程を検討する。この作業を通じて、カミングアウトにより親子関係がどのように変容するのか／しないのかを明らかにすることを目指す。

同性愛と定位家族は、緊張関係にあるものとして理解されてきた。日本では高度経済成長期以降、次世代の労働力である子どもを市場に供給する場として家族に期待が集まるようになる(落合 [1989] 2022, pp. 16-18)。このことは同時に、生殖に結びつかない性関係の逸脱視を助長する。そのため、同性愛者は異性愛規範にもとづく定位家族から疎外されると指摘されてきた(風間 2003, p. 34)。また、同性愛者であることが家族に発覚し、家族から同性愛を否定する言葉を投げかけられたり、暴力を振るわれたりする事例が報告されている(河口 1999, pp. 41-44, 石丸 2008, pp. 73-74)。このように、同性愛研究においては、定位家族は同性愛者にとって抑圧的な場であること、同性愛者であることが家族成員に発覚すると同性愛者は困難や葛藤に直面することが強調されてきた。

こうした定位家族観に変化がみられるようになったのは、2010年代以降である。この時期からは、家族社会学者によりカミングアウトをキーワードとした経験的研究が蓄積される。カミングアウト(Coming Out)は「クローゼットから外に出る(Coming Out of the Closet)」というフレーズに由来し、自身が同性愛者であることを周囲

の人びとや社会に秘匿している状態である「クローゼット」から外に出て、自らのセクシュアリティを周囲に伝えることを指す。カミングアウト実践は、同性愛者の抑圧からの解放や同性愛を逸脱視する社会規範の変革を求めて行われていた(Altman 訳書 2010, Kitsuse 1980)。カミングアウトをキーワードとした家族社会学的研究においても、同性愛者を抑圧する場としてしか語られてこなかった定位家族が、カミングアウトを通じて変容する実態が明らかになりつつある。

家族にカミングアウトする同性愛者やカミングアウトされた家族に対するインタビュー調査を通じて、先行研究は以下の知見を示してきた。第一に、カミングアウトを受容する家族の存在を明らかにしている。家族にカミングアウトしている同性愛者にインタビューを行った研究では、同性愛者と親の間に直接的な対立や葛藤が生じない事例が紹介されている(新ヶ江 2014)。またカミングアウトされた親にインタビューした研究は、子どものカミングアウトを起点として、悲嘆や困難を経験しながら、親が子どものカミングアウトを受容する過程に着目する(元山 2014, 三部 2014)。これにより、困難や抑圧のみでは説明しきれない同性愛者とその家族の関係を議論の俎上に載せた。

第二に、カミングアウト受容がもたらす家族への影響を明らかにしている。これには、家族成員の規範が強まる場合と相対化される場合がある。前者について、母はカミングアウトを母としてのアイデンティティが脅かされる経験と意味づけ、それを回避するために積極的に母親役割を担い、そのなかで、異性愛規範と同性愛嫌悪に対する批判的な視点を獲得することがある(元山 2014)。後者について、家族成員に同性愛者がいると周囲にカミングアウトする事例(Motoyama 2019)や、子どもからカミングアウトによって自身の同性への性的指向を自覚した結果、「家父長制異性愛規範家族」を相対化し、新

しい家族を構成する事例が明らかにされている（元山 2023）。

第三に、カミングアウト受容の実践的な様相を明らかにしている。カミングアウトを受容する際に、親が社会のなかで「ふつう」ではないとされる自身のマイノリティ性を参照することで、「ふつう」ではない同性愛者を受け容れていくことがある（三部 2014, pp. 144-147）。また、家族が同性愛者を「ふつうの人」であると再確認し、受け容れていく実践が明らかにされている（元山 2017）。このように、2010年代以降の研究群は、カミングアウトをされた親の経験や意味づけに特に着目することで、既存の「同性愛と定位家族」観とは異なる見方を提示し、カミングアウト受容がもたらす家族への影響と、カミングアウト受容の際の多様な実践の様相を明らかにしてきたといえる。

しかし、先行研究は、カミングアウトの受容がいかになされるのかという問いについて、親側もしくは子側のいずれかの視点からしか検討してこなかった。先行研究におけるデータ採取の方法は、ほとんどが親を対象としたインタビューである。それにより、子がカミングアウト受容において果たす役割や、カミングアウトによって揺らいだ親子関係を双方の協働を通じて修復していく過程、すなわち親子の相互作用を通じたカミングアウト受容のプロセスを捉えそこなってきた。もちろん、親に着目した研究のなかには、子どもに対してもインタビューを実施している研究もある（三部 2014, 元山 2023）。ただし、その場合においても、インタビューは親と子それぞれ個別に行われており、親子の相互作用そのものは分析されていない⁴⁾。

（2）インタビューの限界と親子の往復書簡の可能性

ここで考慮に入れなければならないのは、インタビューという手法ではカミングアウトをめぐる親子の相互作用を分析することが難しいということである。子どもの性的指向をめぐる問題について、親子双方に研究参加の同意を取り、実際に語りを聞き取る調査は実現可能性が低い。また、倫理的な問題として、心的侵襲性のある過去の経験を想起させることも考えられる。さらに、仮に親子間でカミングアウトを回顧的に振り返ることができる関係性が構築されているとしても、当時の相手の言動や態度などに対して納得のいっていない事項が露わになる可能性がある。そのため、インタビューをきっかけとして、研究に参加した親子の関係が悪化する場合も考えられる。こうした点を踏まえるならば、既存の研究とは異なる手法を用いることで、親子の相互作用について考

察を行う必要があるだろう。

そこで、公刊されている親子の往復書簡を分析するという研究方法を本稿は提案する。これは、インタビュー調査の方法論的限界を補う研究方法として意義があると考えられる。まず、インタビューで獲得することが難しい相互作用場面を容易に分析できる。公刊されている往復書簡は入手が容易であり、上述した倫理的な問題を回避したデータを分析できる。さらに、往復書簡からは調査者が介在しない親子の相互作用を分析できる。往復書簡は、手紙を通じて執筆者が相手にメッセージを送り合うことから、「パーソナル・ドキュメントであり、同時に当事者双方による相互行為そのものである」（布施 2015, p. 137）。このように往復書簡を分析することは、インタビュー調査を中心としてきた先行研究に対して積極的意義をもつ分析手法である。

以上のことから、本稿はカミングアウトをめぐる親子の往復書簡を対象とした文書分析を行う。これにより、家族社会学において十分な議論が蓄積されてこなかった、同性愛者である子とその親の相互作用によって達成されるカミングアウト受容の過程について検討する。この作業を通じて、カミングアウトにより親子関係がいかに変容する／しないのかを明らかにすることを目指す。

なお、本稿は家族社会学的意義のみならず教育社会学的意義も有する。教育社会学領域においては近年、性的マイノリティに着目した研究の必要性が叫ばれている

（多賀・天童 2013, pp. 129-130, 多賀 2017, pp. 152-154）。それに呼応するように、性的マイノリティの学校経験に着目した研究は少しずつ蓄積されている（土肥 2015, 島袋 2022）が、マイノリティの若者を学校のみならず家庭や若者文化の側面から総合的に捉えることで、複数の社会的力学が作用するなかで若者が生活する実態を検討できることが指摘されている（知念 2018）。同性愛者の子とその親の相互作用に着目する本稿は、若年同性愛者の実態を学校のみならず家庭も含めて総合的に捉えることに寄与すると思われる。

本稿の構成は以下の通りである⁵⁾。まず第2節では、分析対象と分析方法（1項）を述べ、分析方針（2項）を提示する。続いて、3節から5節にわたって分析結果を紹介し、6節にて考察、7節において結語を述べる。

2. 分析の概要

（1）分析対象と分析手法

本稿の分析対象とするのは、『カミングアウト・レターズ』（RYOJI・砂川 2007）に収録されている往復書簡で

ある。本書は、同性愛者が自身の親や教師など身近な人に行ったカミングアウトを回顧する手紙と、それに対する身近な人による応答の手紙が収録されたノンフィクション本である⁽³⁾。収録されている親子の往復書簡は、カミングアウトをめぐる葛藤とそれを乗り越えようとする親子の詳細な心境が記述されていると評価されており

(釜野 2009, p. 152, 幅・NHK「理想的本箱」制作チーム 2023)、2023年11月時点で10刷に達するなど、現在でも広く読まれている。

本稿は、3組の親子の相互作用を分析する。本書には、同性愛者である子とその親の往復書簡5組と、同性愛者である生徒とその教師の往復書簡2組が収録されているが、そのうち、昌志(27歳)と母(55歳)、義弘(32歳)と母(58歳)、剛志(29歳)と母(56歳)の3組の往復書簡に着目する⁽⁴⁾。手紙をめぐるのは、書き手と宛先人の社会的関係が、手紙執筆時の枠組として強力に作用するという(伊東 1985)。親子の往復書簡は親子という社会的関係が手紙の執筆形態や内容に影響を与えている可能性が高く、親子の往復書簡は本稿の目的に資する分析対象といえるだろう。本稿はそれぞれの往復書簡を、カミングアウトをめぐる親子の相互作用そのものとみなして分析することで、カミングアウト受容を通じて親子関係がいかに変容する／しないのかを検討する。

なお、前節で示したように公刊された往復書簡は相互作用そのものである一方、以下の点については注意を要する。第一に、手紙を送り合うという往復書簡の形式である。手紙は、非対面かつ非共時的に、推敲された文字情報のみを通じて行うコミュニケーション形態である。また、手紙は対面での会話や電話などの共時的コミュニケーションではないため、非言語的情報(表情、声のトーンなど)を共有することはできない。そのため、相互作用の展開や語られる内容が、対面での会話や電話とは異なると考えられる。

第二に、手紙を送り合える関係性がすでに親子の間に構築されている点である。親子は往復書簡のなかでさまざまなメッセージを送り合っているが、それらのメッセージは、手紙を送り合える関係性にもとづくものであることに注意しなければならない。

第三に、往復書簡が公刊されている点である。親子も公刊されることを知ったうえで手紙を書く以上、公にされたくないことは脚色したり、書かなかったりすると推察できる。また、出版物である以上、手紙の内容に対して、ある程度の編集がなされている可能性は否定できない。以上のような限界はあるが、前節で示したように、インタビュー調査により親子の相互作用を分析すること

の様々な障壁を踏まえれば、公刊された往復書簡を分析することには積極的な意義が認められるといえよう。

分析手法としては、KJ法を採用している。KJ法とは、川喜田二郎が提唱した分析手法であり、小紙片に書いた情報をグルーピングして図式化・文章化することで、新しい着想を得たり情報のまとめを可能にしたりする方法である(川喜田 1967, 1970, 1996)。本稿の分析対象は3組の往復書簡という小規模データであり、かつ追加調査を行うことは難しい性質のものである。そのため、大規模データの分析を行うテキストマイニングや、理論的飽和に達するまで調査を行うグラウンデッド・セオリー・アプローチは本稿の分析手法としては相応しくない。他方KJ法は小規模データに内在する意味を分析でき、かつ相互作用の時間的変容や応答関係も視覚的に表示できる。親子の相互作用における意味を分析し、図式化して簡潔に提示することは本稿の目的に資すると考え、KJ法を採用するに至った。

本稿では以下の手続きでKJ法を行った。まず、第一著者と第二著者が、1組の往復書簡ごとに、テキスト全体において重要だと判断した箇所と各自が気になった箇所を、小紙片に1つずつ書き出した⁽⁵⁾。次に、話し合いのもと、それらの小紙片をグループに分類し、各グループにコーディングをすることで、カテゴリー化を行った。最後に、グループ同士を関係づけて図式化を行うとともに、その図をもとに文章化を行った。次節以降では、KJ法によって構成された図と、その図をもとに作成した文章を分析結果として提示する。

(2) 分析方針：フーコーの権力理論

カミングアウト受容を通じた親子関係の変容を検討する本稿は、M. フーコーの権力理論を参照する⁽⁶⁾。フーコーは、「権力とは、一つの制度でもなく、一つの構造でもない、ある種の人々が持っているある種の力でもない。それは特定の社会において、錯綜した戦略的状况に与えられる名称なのである」(Foucault 訳書 1986, pp. 120-121)と指摘する。このことを踏まえれば、権力とは「持つ者」が「持たざる者」に一方向的に行使するものではなく、日常生活のあらゆる場面に偏在し、無数の力関係が不安定に生起する状況である。つまり、「真理を語ると自称する者とその真理を信じる者、教師と生徒、上司と部下、男性と女性、父親と母親と子供といった日常生活のすみずみに張り巡らされた人間の間の力関係の網の目」(中山 1996, p. 137)として、権力を分析することが可能となる。

フーコーの権力論において特筆すべきは、あらかじめ埋め込まれた非対称性に還元されないダイナミクスを権

力はもつと捉えた点にある。「権力とは手に入れることができるような、奪って得られるような、分割されるような何物か、人が保有したり手放したりするような何物かではない。権力は、無数の点を出発点として、不平等かつ可動的な勝負(ゲーム)の中で行使される」(Foucault 訳書 1986, p. 121)。勝負の比喻からは、権力が常に変動し、あらかじめ埋め込まれた非対称性を越えて展開することも想定されていることが分かる。フーコーは、人間関係のなかで常に変化し、互いに戦略的に繰り広げられる相互作用的实践を、権力関係のダイナミクスとして捉えている(近藤 1989, 藤田 2003)。

こうしたフーコーの権力観は、カミングアウト研究においても積極的に援用されてきた。その際研究者は、フーコーの「抵抗」の議論に着目し、カミングアウトを私的な告白ではなく、同性愛／異性愛の非対称性に抵抗する実践として理論化した(河口 1997, 風間 2002)。フーコーの権力理論を援用したカミングアウト論においては、同性愛／異性愛の権力関係が変動する実態が中心的に検討されてきた。

ただし、同性愛／異性愛の権力関係に着目するだけでは、日常生活において行われる身近な他者へのカミングアウトのダイナミクスを十全に説明することはできない。身近な他者に実際に行われるカミングアウトは、同性愛／異性愛以外にも、大抵はさまざまな不平等な諸関係(男と女、親と子など)に埋め込まれながら展開されるからである。カミングアウトした人とされた人の関係性がいかに変容する／しないのかを検討する本稿の目的に照らせば、同性愛／異性愛以外の権力関係についても目を向け、カミングアウト受容をめぐるダイナミクスを捉える必要がある。

そこで本稿は、親子の相互作用という分析対象に鑑みて、同性愛／異性愛の権力関係のみならず、親／子の権力関係についても焦点を当てる。教育学や家族社会学において、子どもとその養育者としての親との間には非対称性があることが指摘されてきた(池谷 1998, pp. 25-28, 船橋 1999, p. 30)。しかし、親子の権力関係の実態はしばしば複雑な様相を呈する。たとえば、親は力関係において自身の子より上位にあるが、強い「子ども中心主義規範」やケアやサポートの必要性ゆえ、子を捨てることは容易ではない(土屋 2013, pp. 16-24)。また、個人の権力の「『強い／弱い』は、個人がおかれている社会環境に大きく依存する、可変的なものである」(土屋 2013, p. 21)という指摘を踏まえるならば、権力関係は個別具体的な文脈に応じて変容するものである。親子関係には同性愛／異性愛同様、あらかじめ埋め込まれた非対称性に還元

されない権力関係のダイナミクスがあることに本稿は着目する。

また本稿は、「知る者／知らない者」の権力関係のダイナミクスにも着目する。これは、18世紀の西洋社会において性科学が真理を標榜したことで、性科学者が真理を「知る者」と自らを称したという、フーコーの権力と知をめぐる分析に着想を得ている(Foucault 訳書 1986, pp. 81-82)。そもそも同性愛者は往々にして、「あなたは異性愛者である」あるいは「同性愛者ではない」と誤って想定している人に対してカミングアウトを行う。それゆえ、カミングアウトした人を「知る者」という誤った想定を持つ者の立場は、カミングアウトを通じて揺らぐことになる。特に親子関係の場合、幼少期から生活を共にしている場合が多く、子を「知る者」という親の立場は強固と推測される。つまり、同性愛／異性愛や親／子のダイナミクスを詳細に捉えるには、カミングアウトを起点に変容する「知る者／知らない者」の複雑な権力関係の動態をみていくことが肝要といえる。

カミングアウトをめぐる相互作用を同性愛／異性愛のみならず、親／子や「知る者／知らない者」の攻防戦に着目して検討することは、カミングアウト研究に対しても一定の示唆を与えると思われる。先述した通りカミングアウト研究は、同性愛／異性愛の権力関係に着目してきた(河口 1997, 風間 2002)。しかし近年、社会的に埋め込まれた非対称性によって、カミングアウトが有する意味や政治的効果が変わることが指摘されている(三部 2019, 大坪 2022)⁽⁷⁾。このことを踏まえれば、権力関係を多元的に捉え、さまざまな非対称性に埋め込まれた社会関係において、カミングアウトがどのような効果をもたらすのかを検討することは、カミングアウト研究に対しても一定の意義があるといえる。

3. Letter 1 : 昌志と母

本節から5節までにおいて、KJ法にもとづく分析を行った結果を示す。3組の相互作用は、Letter 1(昌志と母、3節)、Letter 2(義弘と母、4節)、Letter 3(剛志と母、5節)の順に提示する。

本節ではLetter 1の分析結果を提示する。カテゴリー同士を関係づけた図は図1の通りである⁽⁸⁾。以降、『カミングアウト・レターズ』(RYOJI・砂川 2007)からの引用はページ数のみを記し、引用者による補足は〔 〕で表記している。また、カテゴリーは〈 〉で表記している。

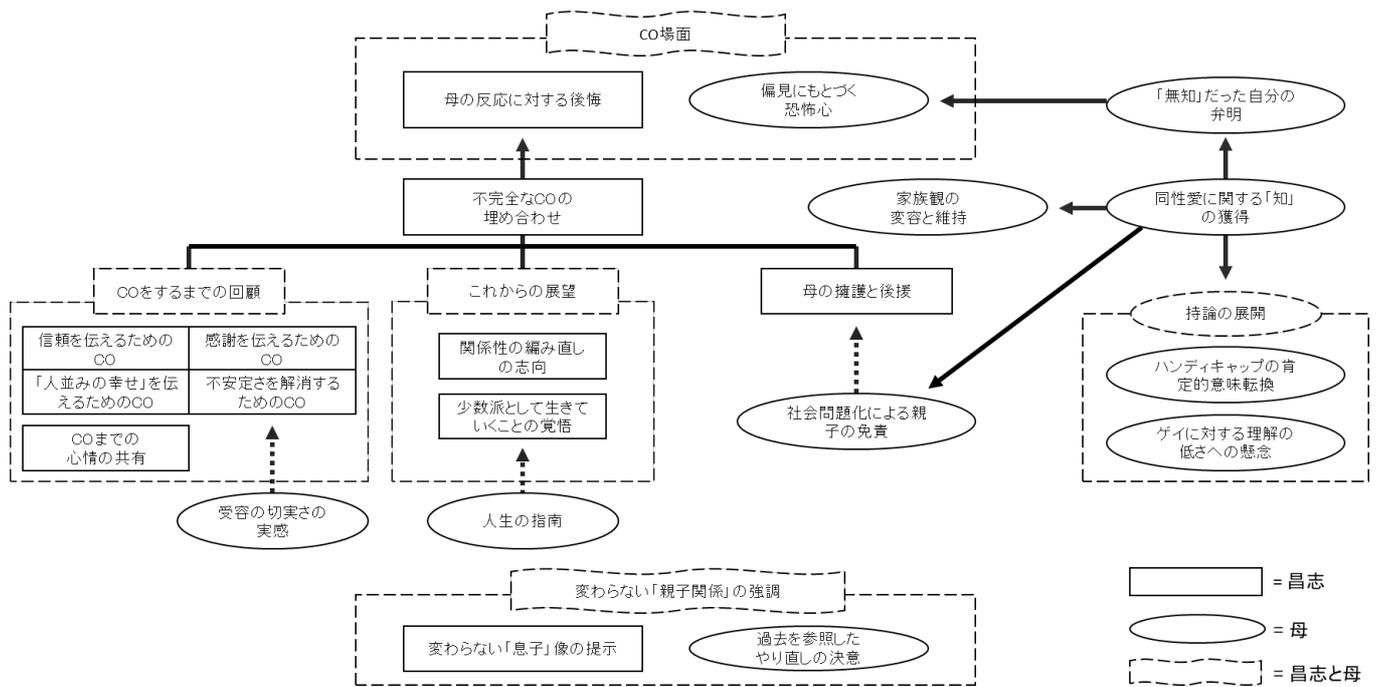


図 1 昌志と母の相互作用

(1) 昌志：不完全なカミングアウトの埋め合わせ

昌志の手紙において中心的な位置づけを与えられているのが、〈母の反応に対する後悔〉である。1年前昌志がカミングアウトした際、母の反応を見た昌志は、後悔を覚えた。「母さんの顔を見たとき、あんなにカミングアウトを願ってたのに、後悔しそうになった」「謝りたかった。逃げだしたかった。全部嘘やってみてやれたら、どんなにええやろうかと思った」(p. 13)。

この後悔を胸に、〈不完全なカミングアウトの埋め合わせ〉をしたいというのが、昌志が手紙を書く動機となっている。手紙の冒頭では、手紙を書くことで当時の心境や状況を整理することが宣言されている。また、「まだ知りたいことあるんやろうな。これからはちゃんと話すから。分からへんこと、不安なこと、俺にできる限り」(p. 14)と、カミングアウトときに説明できなかったことを、今後は丁寧に説明していくと語る。

〈不完全なカミングアウトの埋め合わせ〉は、3つの要素によって構成される。第一に、〈母の擁護と後援〉である。「母さんが知らない世界のことで、知らないからすぐに理解できなかったとしても、俺はそれで傷ついたりせんから」(p. 15)のように、それまで同性愛について何も考えたことのなかった母がカミングアウトによってショックを受けたのは無理もないことであると述べる。

第二に、〈カミングアウトをするまでの回顧〉である。ここでは、母にショックを与えるためにカミングアウトをしたわけではないことを示すために、カミングアウトの4つの動機が語られている。たとえば〈不安定さを解

消するためのカミングアウト〉では、「やっぱり人の子って、親に受け入れられないとどこかもろくて、どこか不安で、なぜか罪悪感を抱えるものやと思う」(p. 17)と語っている。昌志にとって母へのカミングアウトは、親に受け入れられるために行ったことであり、精神的な受容が切実な課題であることを示唆している。また、〈カミングアウトまでの心情の共有〉では、カミングアウト直前まで葛藤や戸惑いがあったことが率直に吐露されている。

第三に、〈これからの展望〉が語られる。ここでは、〈少数派として生きていくことの覚悟〉と〈関係性の編み直しの志向〉が語られる。前者について昌志は、「今、俺にはたくさんのゲイの友達がいる」が「ゲイの子どもだけが通う学校」は「つまらん」という。それは、「人はものすごくバラエティがあって、誰も同じやないから楽しいのに、同じ子だけ集まった場所があったら、きっと、また違う種類の小さな社会ができるだけやから」であり、「俺は少数派であることを実感する社会のなかで生きて、痛みを忘れないでいたいねん」と宣言する(p. 16)。後者については、「俺は気持ちを話したんやから、これからは母さんや父さんの気持ちを聞いていきたい」(p. 19)と、往復書簡を通じて親子関係を新たに構築し直していこうとする昌志の決意がみて取れる。

(2) 母：獲得した同性愛の「知」にもとづく応答

母の返信のなかで中核的な位置を占めていたのは、〈同性愛に関する「知」の獲得〉である。カミングアウトを受けて母は、「この社会がゲイの子どもにどれほど過酷な

ものを突きつけているのか、私達はようやく知ったのです」(p. 24)と、同性愛者が社会で直面する困難について知ることになったと述べる。

同性愛に関する「知」を獲得した母は、カミングアウト前やカミングアウト直後の自らを振り返る。第一に、〈「無知」だった自分の弁明〉ではカミングアウト場面において〈偏見にもとづく恐怖心〉を抱いてしまった過去の自分に対する反省と弁明がなされている。息子からカミングアウトされた際の反応として、「怖かった。あなたが悪いほうへ行ってしまみたいで」(p. 20)と、息子が理解不可能になったと感じたことが語られる。しかし、「でもね、分かるよね。お母さんがこれまで、どんなに、ゲイの人達について偏見ばかりを聞いてきたか」(p. 20)のように、カミングアウト直後の恐怖心は同性愛について知る機会がなかったがゆえのものだと説明する。このように母は、同性愛に関する「知」を獲得したことで、同性愛について「無知」だったゆえにカミングアウト直後は否定的反応を示してしまったのだと考えるようになった。

第二に、〈社会問題化による親子の免責〉が語られる。昌志の〈母の擁護と後援〉に応答して母は、「あなたを責めたく思ったのかも知れない。でもそれはみんな、少しもあなたのせいじゃない。きっと本当は、私のせいでもない。」(p. 21)と、カミングアウトによって親子双方が経験したショックは息子の責任でも母の責任でもない」と述べる。ここでは、同性愛に対する「無知」の責任を社会に見出すことで、悲嘆の責任を社会へと外在化しているといえる。

第三に母は、自ら得た同性愛の「知」にもとづき、同性愛について積極的に語るようになる(持論の展開)。〈ハンディキャップの肯定的意味転換〉では、『「なぜ」子孫を残す役割のために生まれられない人達がいるのか答えがあるとしたら、それは人生の不思議さや豊かさ、可能性を人類が学ばなければいけないからじゃないかな」(p. 26)と、子どもを持たない同性愛者の存在理由を肯定的に解釈する。また、〈ゲイに対する理解の低さへの懸念〉では、「[ゲイによる]周囲の人へのカミングアウトなどを通じての努力は尊敬するけれど、ゲイ社会からの社会への働きかけはどれほどできているのでしょうか」(pp. 25-6)と、日本の社会がゲイを十分に理解していない要員に関して持論を展開する。

第四に、〈家族観の変容と維持〉が語られる。「あなたはお母さんを育てようとして、私のところに生まれたのかもね」(p. 27)や、「三人目の息子をどんな顔で迎えるのか、ちょっと楽しみですわね」(p. 32)という語りは、

息子を産んだ意味の再定義や、息子の交際相手の受け容れを意味している点で、母の家族観の変容がみられる。一方で、これらの語りには息子が生まれた意味を再定義している点や、息子のパートナーを新しい家族成員として受け容れようとしている点で、家族関係を再補強する側面がある。このように、母の家族観は変容しつつも維持されているといえる。

その他の応答としては、〈受容の切実さの実感〉と〈人生の指南〉がある。前者は〈不安定さを解消するためのカミングアウト〉への応答であり、家族が本来子どもを受容する場であるにもかかわらず、同性愛者の場合はそれがなされにくいこと、それが同性愛者の抱える苦悩であることに思いを馳せている。後者は〈少数派として生きていくことの覚悟〉に対するリアクションであり、「あなたが人生に負け、哀れまれるだけの人になる時があるとしたら、それはゲイだからじゃなく、心の狭い人間になった時なんですよ」(p. 29)、「それから、幸せになれるよね？ あなたのかたちでいい。幸せになりなさい」(p. 29)と息子に啓発的な言葉を送っている。

(3) 息子と母：変わらない「親子関係」の強調

最後に、両者が互いに参照し合っていた過去の経験について検討する。「店に現われたよそ行きの格好の母さんを見て、子どもの頃『お出かけ』が楽しみやったのを思い出したよ」(p. 11)、「あの瞬間[カミングアウト直後]、母さんが話し続けてくれなかったら、逃げだしてたかも。子どもに戻ったみたいやった。後ろめたくて帰れなくて、いつもそんなんやった小学校の頃みたいよ」(p. 14)のように、昌志は母にしか分からないエピソードを挿入しながら、親の庇護下にいた幼い頃の「息子」像と現在の自身が連続的な存在であることを提示する(「変わらない「息子」像の提示」)。

他方で母は、「[カミングアウトされた日の] 帰り道の二十キロの距離を時間をかけながら帰って、スーパーに寄って、インゲン豆をいっぱい入れた肉じゃがを作った。それはまだ家にいた頃のあなたの好物だった。時間をかけて、お父さんとお兄ちゃんに話そう、家族をやり直そうと思った」(p. 24)と、過去の息子の情報を参照して行動した姿を示している(〈過去を参照したやり直しの決意〉)。ここでは、過去の「息子」像を母も参照することで、自身が息子の理解者であることを強調しているといえる。

(4) 小括

フーコーの権力理論の観点から Letter 1 の相互作用を

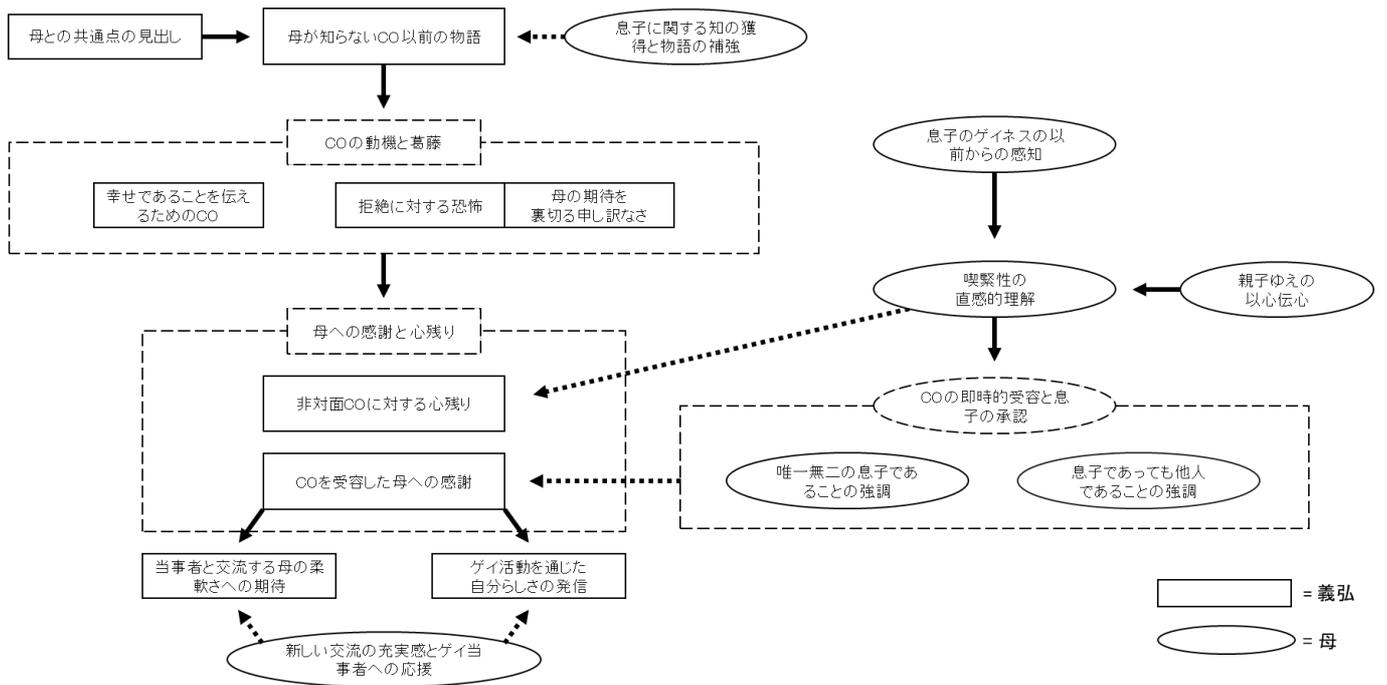


図2 義弘と母の相互作用

分析すると、以下のことが指摘できる。第一に、母にとってカミングアウトは「母は息子のことを知っている」という前提が覆される実践であった。〈偏見にもとづく恐怖心〉に現れているように、母にとって息子からのカミングアウトは、「理解可能」だった息子が「理解不可能」な存在になることを意味していた。このことから、カミングアウトは「息子を知る者」としての母の地位を揺るがす経験として母に理解されているといえる。

第二に、母の反応に後悔を覚えた昌志は、手紙のなかで自身を母にとって「理解可能」な存在であると示そうとしていた。昌志はセクシュアリティ非関与な自身の「過去」を参照することで、カミングアウト以前と一貫性を持った「息子」像を提示していた。この点をめぐっては、母もまた、過去のエピソードを参照することで、カミングアウト以前と以降の息子像は断絶するものではなく、連続したものとして理解していることを伝えていた。これらのことから、昌志は母に自身を「知る者」になってもらうことを求め、同時に母は息子を「知る者」として自身を提示していたといえる。

第三に、母は、同性愛に関する「知」を獲得したことによって、同性愛者である息子を「理解可能」な存在として認識している。同性愛に関する「知」を獲得した母は、カミングアウトされた直後の自身は同性愛について「無知」だったと回顧的に再構成する。さらには社会問題と接続して同性愛の問題を理解することで、カミングアウトをめぐる両者の戸惑いを免責している。このように、同性愛について「知らない者」から「知る者」に変

化した母は、自らを同性愛と息子を「知る者」として提示することで、カミングアウトを受容する。結果として、「母は息子を知る者である」という親子関係は、カミングアウト受容を通して強固になったといえる。

4. Letter 2 : 義弘と母

本節では、Letter 2 の分析結果を示す。カテゴリー同士を関係づけた図は図2 の通りである。

(1) 義弘：母への感謝と心残り

Letter 1 の昌志の手紙と比較して、義弘の手紙には、ゲイとして自覚しカミングアウトするまでの自己物語が記されている点が特徴的である。〈母が知らないカミングアウト以前の物語〉では、幼少期に「おかま」といじめられるなかで、同性を好きになることを逸脱的に捉えていたことや、自分の周りには同性愛者が存在しないと思っていたことなどが紹介されている。そこから義弘は、ゲイ・コミュニティへの参加を通して、ゲイやレズビアン⁹⁾の友達ができ、孤独から解放され、自身が同性愛者であることを受容するに至った。こうした経緯を「お母さんには知ってほしいな、と思って、書いてみた」(p. 35) と義弘は述べる。

義弘は母へのカミングアウトを決意するが、そこには躊躇いもあった。〈カミングアウトの動機と葛藤〉では、そうした両義的な思いが描かれている。カミングアウトの動機としては、自身がゲイであることを受容し、他の

同性愛者の友達と遊ぶ日々がとても楽しいこと、幸せであることを母にも分かって欲しいと思ったことがある

(〈幸せであることを伝えるためのカミングアウト〉)。ただし、〈拒絶に対する恐怖〉や、「だって、お母さんも、孫の顔とか見たいよね？」(p. 38) と、孫の顔をみせるという〈母の期待を裏切る申し訳なさ〉もあり、なかなかカミングアウトできずにいた。

そんななか、電話越しに義弘は母にカミングアウトする。その際に〈カミングアウトを受容した母への感謝〉が語られる。「『ゲイでも、あんたは私の子ども』と言ってくれたお母さんにとっても感謝をしています」(p. 36)。

一方、カミングアウトの方法をめぐっては心残りがある。「電話でごめんね。本当はちゃんと会って話したかったんだけどね」(p. 36) と、電話越しでのカミングアウトは本意ではなかったこと、対面でカミングアウトしたことが綴られる(〈非対面カミングアウトに対する心残り〉)。このように、義弘の手紙では、〈母への感謝と心残り〉を伝えることが中心的なテーマとなっていた。

こうしたカミングアウトに至る過程のあと、義弘は自らの社会運動とのかかわりについて語る。〈ゲイ活動を通じた自分らしさの発信〉では、自分らしさを大切にゲイ活動に参画していることが語られ、また〈当事者と交流する母の柔軟さへの期待〉では、ゲイ活動に積極的に関与し、義弘以外の同性愛当事者とも交流する母の姿が描かれる。そうした姿勢に義弘は「お母さんが感覚が若いところって、僕はとっても好きだし、ずっと失くしてほしくないと思うから、その若さはもっててね」(pp. 38-39) と述べ、母が柔軟でい続けてくれることを期待している。

(2) 母：息子の心残りの解消

母は返信において、息子の自己物語を補足しつつ、息子の心残りを解消しようとしている。まず母は〈息子に関する知の獲得と物語の補強〉において、息子の過去について知り、その過去の物語を補う話題を提供する。息子に関する過去を手紙で提示されたことを受け、「改めて手紙を読みながら、私の想像以上に悩みは深かったんだろうなあ、と今さらながら思いました」(p. 41) と、息子が長く悩みや不安を抱えて生きてきたことを母は知る。同時に、「貴方は、小さい頃から要素はあったと思います」(p. 41) と、幼少期からの息子と今の息子の連続性を指摘する。また、〈息子のゲイネスの以前からの感知〉においては、大学入学後、社会人の友達と一緒に暮らしたいと告げたあたりで、息子がゲイなのではないかと感じ始めたということが語られる。

カミングアウト場面については、伝え方をめぐって息

子が覚える心残りを解消しようとしている。「電話でもいいからすぐのほうが、たとえその場で答えを出すことができなくても、今聞いたほうがいいという思いが先でした」(p. 42) とあるように、母は話題の喫緊性を直観的に理解し、その場でカミングアウトを迫ったのだと説明する(〈喫緊性の直感的理解〉)。その際に、「その時〔電話をしたとき〕、何故かピンとを感じるものがありました。これぞ『以心伝心』でしょうか？」(p. 42) と、親子であるからこそ喫緊性を直感的に理解したと意味づけている(〈親子ゆえの以心伝心〉)。

カミングアウト後にすぐに息子を受容した背景については、〈カミングアウトの即時的受容と息子の承認〉において2つのことが語られている。まず、〈唯一無二の息子であることの強調〉では、「世間の人になんと言おうが、私の息子に変わりはない」(p. 43) と、唯一無二の息子を受容することの重要性が表明される。次に、〈息子であっても他人であることの強調〉では、息子の人生はあくまでも息子自身の人生であって、「親の所有物ではない」(p. 43) という母の意識が表明される。このように母は、息子に息子性のみならず他者性を見出すことで、息子のカミングアウトを受容した。

手紙の最後に母は、息子からのカミングアウトをきっかけにはじまった当事者との交流やそれを踏まえたメッセージを〈新しい交流の充実感とゲイ当事者への応援〉において提示する。母はゲイ活動での手伝いのみならず、当事者の親の会にも参加するようになり、その過程で友達が増え、さまざまなことが共有できるようになった。ゲイ当事者やその家族との交流は本人に充実感をもたらしているという。これは、息子が期待する「柔軟な母」像に応えることになっている。そして同性愛者が優しくもナイーブになりがちであることを踏まえ、当事者に対して「『負けないで!』」「トライする気持ちを恐れなくて!」(p. 44) と応援のメッセージを送る。

(3) 小括

Letter 2 を権力関係に着目して検討すると、以下のことが分かる。第一に、息子が提示する自己物語に、母は完全には同一化しない。義弘は同性愛者としての息子の過去を知らない母に対して、カミングアウト以前の自己物語を共有する。これに対して母は、知らないことばかりであったことを認めつつも、母の知る「息子」像を参照することで、過去の息子の姿にゲイネスを見出す。ここには、母であるからこそ知っている「息子」像を強調することで、息子の自己物語に完全には同一化せず、むしろ幼少期からの息子を「知る者」の観点から補強する態

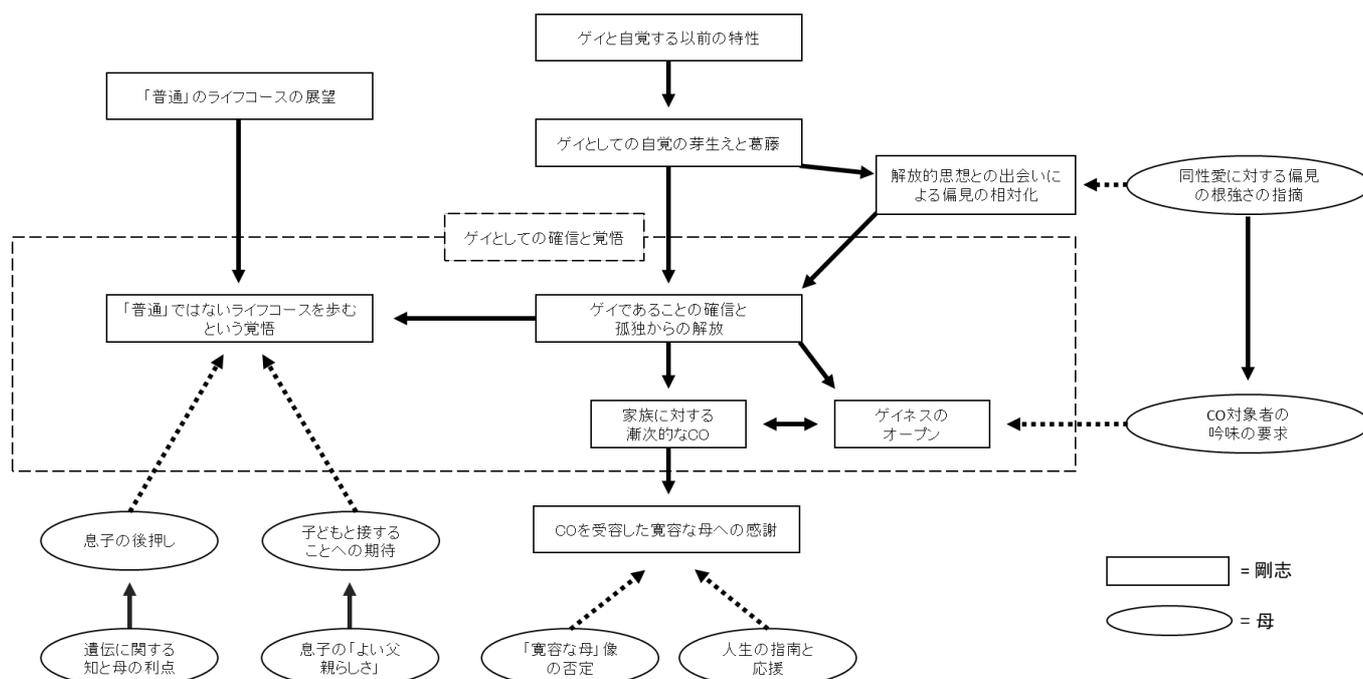


図 3 剛志と母の相互作用

度がみられる。

第二に、母の返信には、親子関係を強調する側面と、相対化する側面がみられる。義弘はカミングアウトを即時的に受容した母に対して感謝の気持ちを伝え、柔軟な母でい続けることに期待しつつも、対面ではなく電話でカミングアウトしたことについて心残りを伝えている。これに対して母は、電話をした際、親ゆえに話題の喫緊性を直感的に理解したのだと説明することで、息子の心残りを解消しようとしている。受容に際しては息子が「唯一無二の息子」であると述べている。このように、カミングアウト受容の結果、親子関係はより強固になったといえる。ただし、息子の人生を管理する発想を拒否し、一定の距離を置くべきであるという考えも同時に示していることから、親子関係を相対化する姿勢もみられる。

5. Letter 3 : 剛志と母

本節では、Letter 3 の分析結果を示す。カテゴリー同士を関係づけた図は図 3 の通りである。

(1) 剛志：寛容な母への感謝

Letter 2 同様に、剛志の手紙では、自己物語が示される。まず、〈ゲイと自覚する以前の特性〉では、自身が幼少期の頃から「男らしい」子どもではなかったことや、子どもの社会で生き抜くためにも自分の「女性らしい」一面を戦略的に封印していたことが語られている。ただし、当時はゲイとしての自覚をもっていなかったため、大人

になったら女性と結婚して父親になるという〈「普通」のライフコースの展望〉を抱いていたという。しかしその後、剛志は次第に自分の性的な関心が同性に向かっていることに気がつくようになる。中学生の頃には、「自分で自分に蓋をしているような状態」(p. 48) だったと述べるように、自身のゲイネスを封印するようになっていた(〈ゲイとしての自覚の芽生えと葛藤〉)。

こうした状況に置かれた剛志だったが、高校生の際には、〈ゲイとしての確信と覚悟〉をもつようになった。転機となったのは、高校入学前の春休みだった。この時期に、図書館の書物を通して同性愛に関する解放的な思想を知り、「大きなカルチャーショック」(p. 49) を受けた(〈解放的思想との出会いによる偏見の相対化〉)。そして、高校から入学してしばらく経ったところに、ゲイ雑誌を読み、「僕はやっぱり自分がそういう種類の間人だって確信しました」(p. 50) と、自身がゲイであることに確信を持ち、さらに、雑誌の読者コーナーを通じて、他のゲイ当事者と知り合うようになった。このことは、それまでゲイは「世界に自分ひとりしかいないような状態」(p. 50) だった剛志にとって、孤独から解放される経験となった(〈ゲイであることの確信と孤独からの解放〉)。

ゲイであることを確信した剛志は、〈「普通」ではないライフコースを歩むという覚悟〉を抱くようになる。そのことに対しては、「なにか覚悟したような、ひらきなおったような気持ちになった」(p. 50) と述懐する。また剛志は、高校の友達にカミングアウトするようになり、友人以外に関しても、「特に秘密にもしていなかったから、

なんとなく知れ渡っていた」(p. 50) ような状況になっていたという (〈ゲイネスのオープン〉)。

ただし、剛志は家族に対してはゲイネスを積極的にオープンにせず、ゲイ雑誌を布団の下に置いたり、男同士がキスをしているスチール写真を絵葉書に混ぜて壁に貼ったりして、段階的にカミングアウトすることを試みた (〈家族に対する漸次的なカミングアウト〉)。そのため、「カミングアウトをいつしたかについては、僕ははっきりわかりません」(p. 51) と述べるように、剛志と母の間には決定的なカミングアウト場面があったわけではなく、いつか母に察知されるようになったと述べる。

母が明確に同性愛に関する話題を出したのは、高校2年生頃だったという。この時、母は剛志に対して、直接「つよし、ホモなの？」(pp. 51-52) と聞き、剛志は「そうだけど、ホモはいい言葉じゃないからゲイっていうんだよ」(p. 52) と応答した。それに対して母は取り乱すこともなく、息子がゲイであることを受容してくれたという。こうしたことから、〈カミングアウトを受容した寛容な母への感謝〉では、『自分が親をすごく苦しめている』という深刻な後ろめたさをあんまり感じなくて済んだ」(p. 52) と、母の寛容な態度によって救われたと感謝の言葉が語られている。

(2) 母：「寛容な母」像の否定と息子の啓発

母からの手紙は、息子からのメッセージに回答していく形で展開されている。ここでは、手紙のなかの文章の展開順ではなく、息子のどのようなメッセージに回答しているのかに着目して分析結果を提示する。

第一に、母は、〈「寛容な母」像の否定〉において、息子が考えるカミングアウト受容の物語に対して、修正を行っている。そもそも、息子の部屋で雑誌を見たという記憶もほとんどなく、男同士がキスをしている写真を目にしたとしても、現代美術を見た時に近い感覚を抱いただけで、息子のゲイネスを察知したわけではなかったという。さらに、息子がはじめてゲイであると聞いた時に驚かなかったのは、『いつまで続くかな』と、流行に飛びつくに似た感じも受けたからだ」(p. 59) と、当時の心境を明かし、即時的に受容をしたわけではないと語る。母がこのように考えたのは、息子が子どものころから、動植物の飼育・栽培に熱心な「好奇心旺盛で趣味の広い子」(p. 59) だったからだという。

第二に、母は自身のゲイネスをオープンにする息子に対して、忠告を行う。母は手紙執筆の数日前に、身近な人から息子が「性障害者」かもしれないと言われたことを明かす。そして、「彼女が世間一般の見方を代表して、

厳しい世界のことを、『性障害』というまちがった言葉で私に教えてくれたのかもしれない」(p. 58) と述べ、同性愛に対する社会のまなざしは依然として偏見に満ちており、世の中は甘くないと諭す (〈同性愛に対する偏見の根強さの指摘〉)。そして、自分自身も無関係ならば同性愛について無理解であったことを述懐し、そのことを踏まえて、〈カミングアウト対象者の吟味の要求〉をしている。

第三に、母は〈「普通」ではないライフコースを歩むという覚悟〉をもつ〈息子の後押し〉をする。母は、「早い話、子孫を残すの残さないのは、気にしないでいいよ」(p. 62) と、息子が子どもを持たない人生を歩むことによって、母に対して後ろめたさを感じる必要はないと語る。この時、母は「あなたの遺伝子は、どこかの誰かが引き継いでいてくれる」(p. 62) という遺伝に関する知を根拠にするとともに、嫁姑関係に頭を悩ますこともないという「利点」を述べている (〈遺伝に関する知と母の利点〉)。ただし、同時に息子ならば良い父親になれたということを想像し (〈息子の「よい父親らしさ」〉)、「強いて欲を言えば、子どもたちと接する機会をつくってほしいなあ」(p. 63) と、〈子どもと接することへの期待〉を語っている。

最後に母は、息子に対して啓発的なメッセージと、息子への応援の気持ちを伝える (〈人生の指南と応援〉)。ここでは、周囲の雑音を取捨選択する力をつける必要や、人生における重要事項について優先順位をつける必要が語られるとともに、「私の息子はクヨクヨするほどやわじやないはず」(p. 65) と、今後の息子を応援する言葉が語られている。

(3) 小括

Letter 3 における権力関係のダイナミクスは以下のよう読み解ける。第一に、Letter 1 や Letter 2 と異なり、母は、息子が母のことを「知らない者」であると強調している。剛志は、カミングアウトを受容してくれた「寛容な母」への感謝を述べる。それに対して母は、息子が期待する「寛容な母」像を否定し、当時カミングアウトを受容したわけではなかったという「本心」を共有する。その根拠として参照していたのは、過去の息子のエピソードであり、息子について「知る者」であるからこそ、カミングアウトを真剣に受けとめなかったのだと語る。これは、母と自分自身について「知る者」(息子) という息子の立場に、修正を迫ることになっている。

第二に、母は息子の自己開示の方針に修正を迫る。剛志は、母にカミングアウトするまでの自己物語を伝えるなかで、解放的思想との出会いにより同性愛の偏見を相

対化し、ゲイネスをオープンにするに至ったと語る。それに対して母は、社会における偏見の根強さを根拠に、カミングアウトをする対象者については吟味すべきだと要求する。ここでは若輩者である息子よりも、年長者である母の方が世間を「知る者」であるということが強調されている。

第三に、母は「普通」ではないライフコースを歩む覚悟をもつ息子の後押しをする。剛志はゲイとしての確信を抱けなから、「普通」ではないライフコースを歩む覚悟をもつようになる。それに対して、母は遺伝に関する知を根拠として、子どもをもたないことは気にしなくてよいと、息子の後押しをする。ただし、息子に関する知(良い父親らしさ)を根拠に、子どもとかかわりを持ってほしいという願望を伝えている。総じて、母は息子から期待される母親像は拒否しつつも、息子の理解者であることを強調しており、さまざまな知を有する者として息子に自己呈示している。このことから、「知る者」としての母の立場は相互作用全体を通して強調されており、Letter 1 と Letter 2 同様に、カミングアウト受容により親子関係は強固になったといえる。

6. 考察

本節では、前節までで検討してきた分析結果から明らかとなったことを、息子(1項)と母(2項)それぞれの観点から整理し、カミングアウト受容の際に参照される規範を特定する(3項)。

(1) 「唯一無二の息子」を強調する息子

カミングアウト以前に成立していた、息子のことをよく「知る者」という親の特権的な地位は、Letter 1 の「怖かった。あなたが悪いほうへ行ってしまいたい」(p. 20) に端的に表れているように、息子からのカミングアウトによって揺るがされる。また、将来結婚して子どもを持つという、カミングアウト以前に親が息子に抱いていた期待も、カミングアウトにより修正を余儀なくされる(Letter 1, Letter 3)。Letter 2 でも、〈母の期待を裏切る申し訳なさ〉により義弘はカミングアウトを躊躇していた。

カミングアウトは、息子について「知る者」という親の立場を転覆させるのみならず、「同性愛について知る者(同性愛者である子)／知らない者(異性愛者である親)」という新たな関係性を組織する。Letter 1 では、息子からのカミングアウトにより、母が同性愛について「無知」であったことを自覚する(「無知」だった自分の弁明)。

また、Letter 3 において「つよし、ホモなの？」(pp. 51-52) と聞いた母に「そうだけど、ホモはいい言葉じゃないからゲイっていうんだよ」(p. 52) と応答した剛志のように、息子が同性愛に関する知を母に提示する場面も紹介されている。

このように既存の権力関係の揺らぎを経験する息子にとって、「完全」なカミングアウトを達成することは難しい。息子たちの手紙は、カミングアウト場面の埋め合わせをしている点が共通していた。カミングアウト場面における母の否定的反応に後悔を覚えた Letter 1 では、母のショックを緩和するために、カミングアウトの動機や当時の心境が詳細に語られていた(カミングアウトをするまでの回顧)。カミングアウトがその場で受容されたと感じている Letter 2 と Letter 3 においても、母には伝えきれないカミングアウトに至るまでの自己物語が詳細に語られる⁽¹⁰⁾。また Letter 2 では、電話によるカミングアウトに対する心残りが語られる。カミングアウト場面において受容がなされたかどうかにかかわらず、息子の手紙にはカミングアウトを補足するメッセージがみられる。このことから、子にとってカミングアウトは「完全」なものにはなり難いことが示唆される。

不完全なカミングアウトを埋め合わせるために、息子は「唯一無二の息子」であることを強調していた。それにより、自身が過去から一貫した、理解可能な存在であることを提示する。Letter 1 では、「後ろめたくて帰れなくて、いつもそんなんやった小学校のころみたいに」(p. 14) と、母にしか分からないセクシュアリティ非関与な自身の過去が参照されている。また Letter 2 と Letter 3 では、同性愛者であると自覚するまでの物語が共有されている。こうした息子たちの物語は、カミングアウト以前とカミングアウト以降の「息子」像が断絶するものではなく、過去から連続性をもったものであることを強調する。それにより、母に対して自身を理解可能な存在として提示していると考えられる。

以上より、息子側は親がカミングアウトを受容しやすいようにメッセージを伝えていることが明らかとなった。また、その際息子が「唯一無二の息子」であることを強調する戦略が採用されていることが示された。この知見は、カミングアウトを主題とした家族社会学的研究に貢献するものである。先行研究では、母親が母親役割を積極的に担うことでカミングアウトを受容していくことが指摘され(元山 2014)、母親側の受容戦略が強調されていた。それに対して本稿は、カミングアウトする子ども側もまた、いわば「子役割」を積極的に担い、自己を理解可能なものとして提示することで、カミングアウト場

面の埋め合わせをしようとすることを明らかにした。本稿の知見にもとづくならば、カミングアウト受容は、親から一方的になされるものではなく、親子双方の歩み寄りによって達成されるものだといえる。

(2) 「知る者」であることを強調する母

息子からの手紙を踏まえた母の返答では、自身が同性愛者の息子をよく「知る者」であるということが強調されている。母は息子からのカミングアウトを通じて得た同性愛に関する「知」を積極的に提示する。たとえば、Letter 1 で母は、自らが同性愛について「無知」であったと回顧している。「この社会がゲイの子どもたちにどれほど過酷なものを突きつけているのか、私達はようやく知ったのです」(p. 24) と、すでに同性愛について「知る者」であることを強調する母の返答には、カミングアウト受容と同性愛に関して「知る者」となることの強い関係性が見てとれる。

また、孫の顔を見ることへの期待は、母が「知る者」となることで修正されている。具体的には、Letter 1 の母は同性愛に関する「持論」をもとに〈ハンディキャップの肯定的意味転換〉を試み、Letter 3 では、遺伝に関する情報を「知る者」として母が自己呈示することで、将来子を持たない息子の後押しを行う(〈遺伝に関する知と母の利点〉)。このように、将来結婚して子を持つという子への期待の揺らぎは、母が「知る者」になることを通じて乗り越えられる。

さらに母は、息子の過去のエピソードを参照することで、息子を過去から「知る者」として自己を提示する。Letter 2 では、息子が共有する自己物語に対し、母の視点から補足や修正を加える(〈息子に関する知の獲得と物語の補強〉)。また Letter 3 では、「好奇心旺盛で趣味の広い子」(p. 59) という母による息子観にもとづき、カミングアウトを即自的に受容しなかったことが語られる。ここに、同性愛について「知る者」であり、息子についても「知る者」であることを強調する母の姿勢が表れている。

このように母が「知る者」であることを強調することで、カミングアウトの受容は達成されていた。Letter 1 では、息子のみならず母もまた、息子のセクシュアリティ非関与な過去を参照し、カミングアウト以前からの変わらない親子関係を強調することで、息子の受容を目指したことが語られる(〈過去を参照したやり直しの決意〉)。また、母は同性愛に関する「知」を参照することで、カミングアウト直後のショックや混乱について、親子双方を免責していた(〈社会問題化による親子の免責〉)。Letter 2 では、母がカミングアウト場面において親子ゆえに喫

緊性を直感的に理解したことが強調されている(〈親子ゆえの以心伝心〉)。このように、同性愛や息子について「知る者」とであると強調することは、カミングアウトの不完全さやカミングアウト場面における心残りを解消し、カミングアウト受容を促進していた。

他方、母が「知る者」であることを強調したことで、親子に埋め込まれた非対称性は強化された。Letter 1 では、同性愛に関する知を獲得した母が、同性愛に関する〈持論の展開〉を行ったり、息子の〈人生の指南〉を示したりしている。人生への指南は Letter 3 においても展開されている(〈人生の指南と応援〉)。Letter 3 ではさらに、母は自身が息子以上に世間について「知る者」とであると強調しており、世間の同性愛に対する偏見の根強さを根拠に、〈カミングアウト対象者の吟味の要求〉を行った。このように、母は同性愛者である息子を「知る者」になることを通じてカミングアウトの不完全さを埋め合わせるが、結果的に「知る者」としての母の立場は強固になり、親子に埋め込まれていた非対称性は再補強されていた。

こうした知見は、2 節 2 項で検討したカミングアウト研究に対し、一定の示唆を与えるといえる。カミングアウト研究は、カミングアウトが同性愛／異性愛の非対称性に作用するダイナミクスを強調してきた(河口 1997, 風間 2002)。それに対して本稿は、カミングアウトを「双方が互いを知っている」という前提を覆す行為として捉え直し、身近な他者が再び「知る者」になり、両者の権力関係が再編成されることでカミングアウト受容が促されることを明らかにした。このように、カミングアウトを「知る者／知らない者」をめぐる攻防戦として捉え直した点に、本稿の意義が認められる。

(3) カミングアウト受容に作用する規範

ここまで、カミングアウト受容により親子関係がいかに変容する／しないのかを、親と子それぞれの立場から検討してきた。本項では、ここまでの議論を踏まえ、カミングアウト受容をもたらす規範として、2 つの要素を特定したい。

第一に、「親子愛」の強調である。1 項でみてきたように、同性愛者である息子は「唯一無二の息子」であることを強調する。それに対して母は、2 項で明らかにしたように、自身が「唯一無二の息子」を「知る者」とであると強調する。息子と母は双方が互いに親子愛を資源のように参照し合いながら、相互行為を展開する。この親子愛を参照することで、同性愛者である息子のカミングアウトは母に受容されるに至ったといえる。

ここに、親子愛を前提に展開される相互作用の両義性がみてとれる。家族社会学においては、カミングアウト受容によって、親が規範的家族観を相対化する視点を獲得する事例が明らかにされている(元山 2023)。しかし、本稿の事例は、むしろ既存の家族規範に沿うことでカミングアウトが受容され、親子関係が強固になるものだった。「家族成員相互の強い情緒的關係」は近代家族の特徴の一つであり(落合 [1989] 2022, p. 16)、本稿にみられたカミングアウト受容はオルタナティブな家族を目指すことによってではなく、強い情緒的關係としての「親子愛」にもとづく近代家族を目指そうとすることによって達成されていた。つまり本稿の知見は、「良好」な親子関係の間ではカミングアウト実践やカミングアウト受容がなされやすいことを示唆している。先行研究が近代家族規範による同性愛者の疎外を問題化していた(風間 2003, p. 34) ことを踏まえれば、カミングアウト受容に際して親子愛を参照することには両価性があることが本稿の事例分析を通じて明らかとなった。

第二に、母の「知る者」への回帰である。カミングアウトは親を、息子について「知る者」から「知らない者」へと変容させる効果をもち、同性愛について「知らない者」であることを強調する効果をもった。この点で息子による母へのカミングアウトは、親子関係に埋め込まれた非対称性を揺るがす実践であった。しかし、母は同性愛と息子について「知る者」であると強調することで、カミングアウトを受容した。結果的に、親子の権力関係はカミングアウト受容を通じて強固になったといえる。

このことは、E. セジウィックの指摘したカミングアウト実践のアンビバレンスを彷彿とさせる。いわく、カミングアウトは「権力を伴う無知を、無知として暴くことができる」一方で、「すでに制度化された無知を劇的に表示することには、いかなる変換の可能性も見出し得ない」(Sedgwick 訳書 1999, p. 110)。カミングアウト実践はカミングアウトされた側の「知る者」という前提を揺さぶるとしても、実際の間人間関係に埋め込まれた非対称性を変革するほどの影響力は持ちえない。カミングアウトは同性愛／異性愛の権力関係に抵抗する実践として理論化されてきた(河口 1997, 風間 2002) が、以上の分析を踏まえれば、本稿の事例はまさに、カミングアウト受容が既存の親子関係に埋め込まれた非対称性を覆すまでには至らなかった事例だと結論づけられるだろう。

7. 結語

本稿は、往復書簡を対象とした文書分析を行い、同性

愛者である子とその親がカミングアウトをめぐる展開する相互作用において達成されるカミングアウト受容を検討した。それにより、カミングアウト受容を通じて親子関係がどのように変容する／しないのかを明らかにすることを目指した。分析の結果、息子は母に対し「唯一無二の息子」であることを強調し、自身を理解可能な存在として積極的に提示していた。他方、母が「唯一無二の息子」を「知る者」だという立場を強調することで、カミングアウトの受容は達成されていた。親子の権力関係はカミングアウトにより再編されるものの、カミングアウト受容を通じて親子の非対称性が強固になることが明らかになった。

本稿の意義は以下の4点に整理できる。第一に、家族社会学に対し、親子の相互作用を分析するために往復書簡を分析するという手法を用いた点に新規性がみられる。同性愛者とその家族に関する先行研究では、同性愛者か親のどちらかにインタビューすることが中心的な手法であったために、親子の相互作用について十分な検討をするには至らなかった。それに対して本稿は、インタビューでは得ることが難しい知見を、文書分析を通して導出した。また、いまだ研究が少なく、調査が難しい若年同性愛者の実態を明らかにした点に、本稿の教育社会学的意義をみることができる。

第二に、家族社会学に対し、親子の相互作用に着目するという視点を導入したことで、母が受容しやすい自己像を提示するという息子側の戦略と、息子の過去を参照することによる母のカミングアウト受容を指摘した。これまでの家族社会学的研究は母の戦略に焦点を当ててきたが、息子にも受容戦略があることが示された。また本稿の知見にもとづくならば、カミングアウト受容は親子双方の歩み寄りによって達成されるものとして捉えることができる。この点に本稿の家族社会学的意義がある。

第三に、カミングアウトの政治性を論じてきたカミングアウト研究に対し、カミングアウトを「知る者／知らない者」をめぐる駆け引きとして捉え直した点に新規性が認められる。本稿の知見からは、カミングアウトが「双方が互いを知っている」という前提を覆す行為であり、カミングアウト受容は他者が同性愛者を再び「知る者」になろうとする行為であることが示された。双方が相手のことを「知る者」であるとする前提は、親子関係のみならず、友人などの他の人間関係にもみられると考えられる。それゆえカミングアウトにおける「知る者／知らない者」関係という視座は、親子関係のみならず、身近な他者一般に対してなされるカミングアウト実践を検討するに際しても応用可能であると考えられる。

第四に、家族社会学的研究やカミングアウト研究に対し、カミングアウト受容に作用する規範として「親子愛」と『知る者』への回帰」を析出した点に意義がある。親子は互いに「親子愛」を強調することでカミングアウト受容をめぐる相互作用を展開していた。また、カミングアウト受容は、母が息子について「知る者」へと回帰することで達成されていた。つまり、本稿の事例においてカミングアウト受容は近代家族的価値観に依拠し、既存の親子関係を強固にする形で達成されていた。

こうした本稿の知見からは、「親子愛」を相互作用において参照することができ、親子関係の再補強を許容できる親子の間では、十全なカミングアウト受容が達成されやすいことが示唆される。本来多様にあり得るはずのカミングアウト受容の形式が、こうした規範を媒介することにより達成されていることを踏まえれば、今後は「親子愛」を参照しないカミングアウト受容や、権力関係の強化を伴わないカミングアウト受容など、カミングアウト受容のオルタナティブな形式についても探究していくことが求められる。

ただし、本稿が着目したのは、あくまでもゲイ男性とその母の相互作用である。今後は息子と母という関係の固有性について考察を進める必要がある。また、父親との関係についても知見を蓄積するとともに、レズビアン（娘）と親の関係についても議論を行う必要がある。最後に、本稿は親／子、「知る者／知らない者」の権力関係に着目してきたが、その他の権力関係（男女など）については十分に議論することができなかった。これらの点の追究は今後の課題としたい。

<付記>

本稿は、2023年9月18日に筑波大学で開催された三大学研究交流セミナー（九州大学、名古屋大学、筑波大学）での共同報告「同性愛者とその親はカミングアウト経験をいかに物語化し合うのか？：KJ法を用いた『カミングアウト・レターズ』の分析」を大幅に加筆・修正したものである。当日報告資料に有益なコメントを下された皆様、セミナーを企画してくださった木村拓也・田中正弘・丸山和昭先生、また草稿に貴重なアドバイスと温かいご支援をくださった久保田裕之・藤間公太・元山琴菜様（以上、順不同）、そして重要なお指摘を賜った2名の匿名査読者様に対し、心より感謝申し上げます。また、本稿は、JST及び名古屋大学による名古屋大学融合フロンティアフェローシップの支援を受けたものです。この場を借りて御礼申し上げます。

<注>

- (1)たとえば、三部（2014）は「カムアウトする親子」を検討することを標榜しているが、調査においては親子それぞれ個別にインタビューしており、「カムアウトする親子」というフレーズが示唆するカミングアウトをめぐる親子の共通の経験を、実際には検討できていないのではないかと批判されている（森山 2015, pp. 304-305）。なお、トランスジェンダーの子とその親の事例ではあるが、親子の相互作用を通じてカミングアウトが受容される過程が記述されている（勝又 2022）。
- (2)本稿の執筆過程は以下の通りである。第一著者（島袋）は2節1項、3節、4節、6節の初稿、第二著者（田中）は1節、2節2項、5節、7節の初稿を執筆し、第一著者と第二著者がそれぞれお互いの執筆した初稿にコメントし合い、修正を重ねた。
- (3)『カミングアウト・レターズ』は、恩師へ元教え子の同性愛者がカミングアウトする往復書簡を作りたいと考えていたアクティヴィストのRYOJIと、身近な人にカミングアウトした同性愛者に渡せる本を作りたいと考えていた文化人類学者の砂川秀樹が意気投合し、カミングアウトをめぐる手紙を執筆してくれる同性愛者とその親／教師を募り、出版されることになったという（RYOJI・砂川 2007, pp. 220-222）。
- (4)『カミングアウト・レターズ』には、本稿で取り上げる3組の往復書簡以外にも、勇太（19歳）と母（59歳）、姉（33歳）の往復書簡と、ターリ（56歳）と母（82歳）の往復書簡が収録されている。前者は親子関係だけでなくきょうだい関係が関わっている点と、母が執筆時に様々な感情を文章として整理しきれず返信が短くなっており、十分な質的データが得られないことから、分析対象にはしなかった。後者は、収録されているなかでは、唯一レズビアンとその母の往復書簡である。本稿は、ゲイである息子と母の関係と、レズビアンである娘と母の関係を一括りにして論じることは双方の固有性を捨象してしまうと判断し、分析対象からは除外した。
- (5)KJ法においては「探検の五原則」、すなわち1) 三六〇度の視角から、2) 飛び石伝いに、3) ハプニングを逸せず、4) なんだか気にかかることを、5) 定性的に捉えよ、というものがある（川喜田 1996, pp. 216-225）。分析の際にテキスト全体において重要だと判断した箇所と各自が気になった箇所を抜き出したのは、「探検の五原則」のうちの一つ目の原則と四つ目の原則にもとづいている。四つ目の原則をめぐるっては、各自の

研究関心（第一著者：若年同性愛者のアイデンティティ形成、第二著者：スティグマを持つ人びとと家族の関係）にもとづき、気になった箇所を小紙片に書き出すことがあった。

- (6)フーコーの権力論は『現在の』権力の網の目を測定する方法論ではあり得ず、基本的には言説の分析の中から事後的に権力の痕跡を見出す方法論（金田 2003, p. 133）、すなわち過去の文書に現れた言説を分析するなかで、そこにみられる権力関係の痕跡を見出すものである。そのため、フーコーの権力理論を援用するにあたって、本稿の採用する文書分析は有効な研究方法であるといえる。
- (7)社会が異性愛的主体を自明視した相互行為を展開することで、同性愛者のみが相互行為の相手にカミングアウトするか否かを日々選択させられることへの「面倒くささ」が指摘されている（大坪 2022）。また、同性愛者のカミングアウトのしやすさにはジェンダー差があることも明らかにされている（三部 2019）。
- (8)本稿におけるすべての図に共通することは以下の点である。図における棒線の矢印は時系列や因果関係の展開、回顧する過去への意味づけを表している。点線の矢印は応答関係を表し、両矢印は対立関係を意味している。四角型の枠は息子に関するカテゴリーを示し、丸型の枠は母に関するカテゴリーを示している。小カテゴリー群を囲う点線は大カテゴリーの範囲を示している。なお、「CO」はカミングアウトの略である。
- (9)友達が数多くできたことについて義弘は、「きっと、友達が多いのは、お母さんに似たんだね」（p. 36）と、母に似たからかもしれないと意味づけている（母との共通点の見出し）。
- (10)カミングアウトまでの自己物語はLetter 1では記述されていないが、これは、カミングアウト場面において母が「分からへんこと聞いていい？」「いつから？」「どうしてそうなんか理由はあるん？」（p. 14）と昌志に質問を重ねており、その過程ですでに自己物語を紹介したからではないかと推測される。

<参考文献>

- Altman, Dennis, [1971] 1993, *Homosexual: Oppression and Liberation*, New York University Press. (=2010, 岡島克樹・河口和也・風間孝訳『ゲイ・アイデンティティ：抑圧と解放』岩波書店)。
- 知念渉, 2018, 『〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィ：ヤンキーの生活世界を描き出す』青弓社。
- 土肥いつき, 2015, 「トランスジェンダー生徒の学校経験：学校の中の性別分化とジェンダー葛藤」『教育社会学研究』第 97 集, pp. 47-66.
- Foucault, Michel, 1976, *La Volonté de Savoir: Histoire de la Sexualité-I-*, Gallimard. (=1986, 渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』新潮社)。
- 藤田博文, 2003, 「ミシェル・フーコーの権力論における「生存の技法」：「戦略」と「抵抗」を可能にするエティックとしての「生存の技法」」『立命館産業社会論集』Vol. 38, No. 4, pp. 153-174.
- 船橋恵子, 1999, 「〈子育て〉の社会的支援と家族」『家族社会学研究』第 11 集, pp. 25-35.
- 布施義宗, 2015, 「ジェンダーの意味の構築と変化：ある夫婦の往復書簡集から読む相互行為」『年報社会学論集』第 28 集, pp. 136-147.
- 幅允孝・NHK「理想的本箱」制作チーム, 2023, 『カミングアウト・レターズ 子どもと親、生徒と教師の往復書簡』『NHK 理想の本箱：君だけのブックガイド』NHK 出版, pp. 98-105.
- 池谷壽夫, 1998, 「〈教育〉的關係の問題性：権威と愛情をめぐって」『社会文化研究』第 2 集, pp. 25-39.
- 石丸径一郎, 2008, 『同性愛者における他者からの拒絶と受容：ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ』ミネルヴァ書房。
- 伊東昌子, 1985, 「手紙文の産出過程」『基礎心理学研究』Vol. 4, No. 1, pp. 19-26.
- 釜野さおり, 2009, 「性愛の多様性と家族の多様性：レズビアン家族・ゲイ家族」牟田和恵編著『家族を超える社会学：新たな生の基盤を求めて』新曜社, pp. 148-171.
- 金田智之, 2003, 「「抵抗」のあとに何が来るのか？：フーコー以降のセクシュアリティ研究に向けて」『年報社会学論集』第 16 集, pp. 126-137.
- 勝又栄政, 2022 『親子は生きづらい：“トランスジェンダー”をめぐる家族の物語』金剛出版。
- 河口和也, 1997, 「懸命にゲイになること：主体・抵抗・生の様式」『現代思想』Vol. 25, No. 3, pp. 186-194.
- , 1999, 「エイズ時代における「同性愛嫌悪（ホモフォビア）」：「ゲイ・ストリート・ユース」の事例を通して」『解放社会学研究』第 13 集, pp. 27-52.
- 川喜田二郎, 1967, 『発想法』中央公論社。
- , 1970, 『続 発想法』中央公論社。
- , 1996, 『川喜田二郎著作集 5 KJ 法：混沌をして語らしめる』中央公論社。
- 風間孝, 2002, 「カミングアウトのポリティクス」『社会学評論』Vol. 53, No. 3, pp. 348-364.
- , 2003, 「同性婚のポリティクス」『家族社会学研

- 究』 Vol. 14, No. 2, pp. 32-42.
- Kitsuse, John, I. 1980, “Coming Out All Over,” *Social Problems*, Vol. 28, No. 1, pp. 1-13.
- 近藤哲郎, 1989, 「フーコーの権力概念と権力分析の構図」『ソシオロジ』 Vol. 34, No. 2, pp. 41-56.
- 森山至貴, 2015, 「書評 ルビンの壺はひび割れていないか：『カムアウトする親子：同性愛と家族の社会学』 三部倫子著」『支援』 第5集, pp. 300-307.
- 元山琴菜, 2014, 「カミングアウトされた家族」から〈非異性愛者をもつ家族〉になることとは：「家族崩壊」に対応する母親役割に着目して」『家族社会学研究』 Vol. 26, No. 2, pp. 114-126.
- , 2017, 「日本における非異性愛をカムアウトされた家族の受け容れ方：差別への働きかけとしての〈ふつう戦略〉とその可能性」『理論と動態』 第10集, pp. 24-41.
- , 2023, 「「家族」を手放し、生きる基盤をつくる実践：非シスジェンダーヘテロセクシュアルを生きる「親子」の生活史から」『家族社会学研究』 Vol. 35, No. 1, pp. 62-75.
- Motoyama, Kotona, 2019, ““Coming Out” as a Family with an LGB Member in Japan: Normalizing Strategies and Negotiating with Social Norms,” *Contemporary Japan*, Vol. 31, No. 2, pp. 159-179.
- 中山元, 1996, 『フーコー入門』 筑摩書房.
- 落合恵美子, [1989] 2022, 『増補新版 近代家族とフェミニズム』 勁草書房.
- 大坪真利子, 2022, 「カミングアウトにかんする選択の「面倒くささ」について：あるシスジェンダー・レズビアン語りから」『理論と動態』 第15集, pp. 84-101.
- RYOJI・砂川秀樹, 2007, 『カミングアウト・レターズ：子どもと親、生徒と教師の往復書簡』 太郎次郎社エディタス.
- 三部倫子, 2014, 『カムアウトする親子：同性愛と家族の社会学』 御茶ノ水書房.
- , 2019, 「カミングアウトしやすいのは「誰」なのか：「LGB」へのインタビューをジェンダーから読み解く」綾部六郎・池田弘乃編著『クィアと法：性規範の解放／開放のために』 日本評論社, pp. 155-77.
- Sedgwick, Eve Kosofsky, 1990, *Epistemology of the Closet*, The University of California Press. (=外岡尚美訳, 1999, 『クローゼットの認識論：セクシュアリティの20世紀』 青土社).
- 島袋海理, 2022, 「若年同性愛者のセクシュアル・アイデンティティ形成過程：学校における生徒との相互行為に着目して」『教育学研究』 Vol. 89, No. 4, pp. 629-641.
- 新ヶ江章友, 2014, 「ヘテロノーマティブな家族と選び取る家族：日本におけるゲイ男性と家族との関係をめぐって」 椎野若菜編著『シングルの人類学2：シングルのつなぐ縁』 人文書院, pp. 217-236.
- 多賀太・天童睦子, 2013, 「教育社会学におけるジェンダー研究の展開：フェミニズム・教育・ポストモダン」『教育社会学研究』 第93集, pp. 119-150.
- 多賀太, 2017, 「「ジェンダーと教育」研究の新展開：不平等の多元化と視点の多様化のなかで」 日本教育社会学会編『教育社会学のフロンティア2 変容する社会と教育のゆくえ』 岩波書店, pp. 145-165.
- 土屋葉, 2013, 「関係をとり結ぶ自由と不自由について：ケアと家族をめぐる逡巡」『支援』 第3集, pp. 14-39.